

診断的開腹術覚え書

幸 府 倂

取り入れの終わった稲田、その彼方紅葉の山野に晩秋の夕日が一きわ輝きわたりやがてつるべおとしに夜がやってくる。

何かをぼんやりと思ひ考えながら送り迎えた窓外の風景も、窓際に張られた電線に日毎数羽の雀が寒々と止まり、眼下の色、形とりどりに組合わされた屋根模様に白雪がいつしかかぶさる季節となった。

1月17日、津山市二階町67番地の丁病院の袂別の日を迎えた。

近代的な7階建の白壁のビルディングではあるけれども、眼にみえぬ白い魔手が巢喰う病室で自然の移り変りをよそに長い期間の生活であったと思う。

ことさらに昼を短かく夜を長く覚えながら時の浪費に明けくれたようである。

ところで此の沈黙と不安の澱んだ雰囲気がただよう病院にあって、加本場長御転勤の報はいささかショックなことであった。

思えばかつての日、本県の畜産に全生命を傾注し、汲めども尽きぬ智力とエネルギーな体力をもって敏腕をふるい全国1、2の畜産県に飛躍し、畜産行政の注視の的たらしめた惣津課長の突然の御転勤というビッグイベントに次ぐイベントであるまいか。

客年葉桜の候もすぎ、そろそろ肌着に汗を感じずる5月16日、加本場長は持ち前の浅黒い顔に心もち緊張したうちにも微笑を浮かべて千屋からの旅路を御入来と相成ったわけである。

蔵知(前)場長によって酪農試験場としての機構、施設の整備充実の大方が果されたあとに着任された加本場長は、着任の日場員に向って“酪農についてはズブの素人である”と齒に衣をきせることなくズバリ言明された。その日から日々の理論、実践に物すごい意欲を燃やされた態度は、私共の安易な試験場生活に無言の鞭となって異常な刺激を与えたものである。

自讃すれば全国ただ1つの酪農試験場、すくなくとも本県の酪農発展のための技術指導、経営指導の機関としてようやくその素地の出来上った此の場に、

いわば酪農のニューフロンティアを持ちこまれたと云いうるのではあるまいか。

ズブの素人であるという控目な言葉は、テクニクにおいては或はそうであったとしても、酪農に対する感覚はまことにシャープなものをお持ちのようであった。

巾広い農政に深い造詣をもたれ言葉のはしはしにその片鱗をうかがったものである。

今日の分化され専門化された技術に携さわる私共はお互の技術を理解し、その技術が生かされる経営経済に深い知識を持たなければならない。技術の中にもれはてる技術者は今日の農業、農民のための農業に縁遠い存在なのではあるまいか。在りし日の場長の実践行動から斯様な思索をしてみた次第である。

私達は邪魔者扱いされる技術者にはなりたくないものである。

場内の公舎で1番近距離にある拙宅の家人はその地の利を得て幾度か酒宴に駆け参じたものである。

かなた眼下にみえるネオンの点滅に誘なわれ城下町津山の夜の情を梯子酒で尋ねたのも1、2回ではなかったろう。

思えば場長の在任期間の3分の1の期間を病院で送った私は異常なまでの御心付けを頂き、当初はかばかしくなかった病状に御心配をおかけしたことは、かえすがえすも無念である。記して深くお詫び申上げたい。

客年の年のくれ手術後1週間ほど経った或る夜更け、場員による送別会の帰路ホットケーキにナイフ、ホークを添えて小さなコップの蜂蜜をこぼさないようにして4階の病室に見舞って頂いた細心の御心づかいに涙をおぼえたのである。

昭和36年1月9日、鳥取県へ旅立たれる場長夫妻を見送る日はついに来たる。

ようやく病院外の散歩が出来るようになった私は、津山駅のホームを遠ざかる自動車の警笛に兄貴を失った淋しさを覚えたのである。病人のセンチメンタリズムであらうか。(1月20日記)

岡山畜産便り 1961.03

県下の獣医師数調べ

県畜産課が 35 年 12 月 31 日現在で調べた県下の獣医師数は 508 人で、その職業別の内訳は次のとおり。

職業別	人数
計	五二〇
獣医事に従事しない者	三〇
個人診療	九五
民間団体	一三九
市町村職員	一九
県職員	二三三
国家公務員	四